

非の打ちどころのない世界

[イザヤ書 11 章 1～9 節]

エッセイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊
思慮と勇気の霊 主を知り、畏れ敬う霊。
彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず
耳にするとところによって弁護することはない。
弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち 唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
正義をその腰の帯とし 真実をその身に帯びる。
狼は小羊と共に宿り 豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。
牛も熊も共に草をはみ その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ 幼子は蝮の巣に手を入れる。
わたしの聖なる山においては
何もかも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように 大地は主を知る知識で満たされる。

[1] 今日からアドベント—クリスマスを「待つ」

今日からクリスマスを待つ季節・アドベントの時を過ごします。今日はロウソク
1本ですけれども、一週間づつロウソクの光が加わって、クリスマス礼拝の日には
4つの光になります。

もちろん私たちはイエス・キリストの誕生が既に起こったことを知っています。
にも拘らず、なぜ“待つ”のでしょうか？ それを今年のクリスマス、よく考え
てみたいと思います。

今日与えられている聖書の箇所はイザヤ書 11 章の前半でした。ここで語られ
ている預言者イザヤの預言は、旧約のイスラエルの民—神様との関係を軽んじ、
国そのものが存亡の危機に陥り、神に見捨てられたと思っていた民（エッセイの

切り株) 一に対して、いや、ここからまだ歴史は続く(芽が出る)のだ、神は霊を下し、このような**メシア・救い主**を与えて救いをなすのだとという、神様から預かった幻を与えます。これはキリストが生まれる**約 700 年ほど前**です。つまり、この預言の言葉が成就するまで、人々は何世代にもわたって、信仰を抱いてこの実現を待ち続けたのです。一人の人生の歩みの中では実現しない。でも**待ちに待った**のです。こういうことを考えると、私たちにとって「クリスマス」とは余りにもお手軽なものになってしまっていないだろうかと思われ反省させられます。

[2] 信仰は、罪に打ち勝った世界に私たちを連れて行く

今日のイザヤ書の言葉ですが、よく読んでみますと、**人間の罪が見え隠れ**しています。3 節以下を見ますと、正しい裁きや弁護がされていないということ、特に弱い立場の人々が隅に押しやられていた現実があったことが分かります。けれども**メシア(救い主)**は何をするかという、派手なことをするのではない、そういう虐げられていた者を正しく裁き、また弁護する、と言うのです。**一人一人が本当に大切にされる世界**ですね。でも、よく考えてみたいことは、本当は私たちは神から造られた者として、他者と共に共生して生きるそのような世界が出来る筈なのです。神様は良きものとして私たちを造って下さったのです。私たちは「イエス様、私の所に来て下さって感謝します」と言いますが、まずその前にすべきことは、あなたが救い主として来て下さる、また十字架にかからねばならないほどに私たちの罪は根深いということを知って、**神様、ごめんなさい**、と言うことなのだなあと思つづく思います。

6 節以下の「**狼は小羊と共に宿り**」から始まるイザヤが語ったイメージは本当に素晴らしいですね。ある意味あり得ない光景が描かれています。ここには強き者と弱き者という区別がなく**共生**しています。また**最も小さき存在**である小さい子供また乳飲み子がこの共同体の中で全く恐れがなく、むしろこの共同体を支えているようにさえ思えます。これはユートピアなのでしょう。天国の風景なのでしょう。確かにそうとも言えると思います。しかし、これは私たちに対するチャレンジでもあると思います。敵を作り、偏見を大きくし、むしろ SNS いじめにも見られるように弱い者を叩き、「**共に宿り、共に伏す**」という世界と反対の世界をあなたたちは作っていないか、それで神に従っていると言えるのか? という問いかけ、チャレンジもあるように思うのです。

先ほど見た動画の中に、ルワンダの**佐々木和之さん**の話がありましたが、あのルワンダで起こった(起こっている)ことというのは、正にこのイザヤ書のイメージのようなことが成就しているように思うのです。佐々木さんたちの働きの

機関紙『ウブムエ』（21年6月発行号）にこんなエピソードがありました。

「初めてこの現場を訪れた人は、加害者と被害者の人が一緒に食事をしているとか、踊っていると驚くわけです。そんなのあり得ないだろうと。そして「本当にこの人たちは和解したのですか」と質問されることがあります。僕はこの質問に違和感があって、「和解した」という言葉で想定していることが、和解が完結し、何のわだかまりもなく、完全に乗り越えたと思えているからかもしれません。しかし、**和解とは、加害者と被害者の関係性が変わっていくプロセスであって、時間がかかること**なのです。深刻な暴力に巻き込まれた人にとって、何かどこかでスパッと終わってしまうことではなくて、一生かけて歩まれるプロセスだと思います。場合によっては世代をいくつも重ねた上で前に進むと思うのですね。ウムチョ・ニャンザ（ニャンザにある「光」という名の工房）の女性たちも、当初被害者の女性たちと加害者を家族に持つ女性たちは敵同士の関係ですよ。深刻な被害を受けている訳ですから感情的にもなって。でも**辛抱強くお互いのストーリーを聞く中で、加害者の妻も大変なことがあるのだとか、同じ女性として抱える課題が共通していることも認識していった**のです。そして生活の足しになるように花を造ったり、バッグを造ったりする作業の中で、共に働く関係になっていったのです」。

佐々木さんはまたこのようなことも語られていました。「現地の被害者の人が「**主の祈り**」を真剣に祈っている姿に出会った。「**私たちに罪を犯す者を私たちが許すごとく、私たちの罪をも許し給え**」。決して優しい祈りではない。けれどもこの祈りが祈られていれば、神様が何かを起こさない筈はない」と。

本当にそうではないでしょうか。神様は生きておられます！ 私たちの教会では礼拝の最後にいつも「祝祷」を捧げる時、テサロニケの信徒への手紙一の5章 23 節以下の言葉を、語っています。その中に「**あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けた所のないものとして守り、主イエス・キリストの来られる時、非の打ちどころのないものとして下さいますように**」という言葉があります。「**非の打ちどころのないものとして下さいますように**」。非の打ちどころのないものになど自分はないと思うと思います。また今日のイザヤ書の光景も、「**非の打ちどころのない世界**」の光景ですが、でも、どちらも幻想ではないと思います。信仰は、**罪の向こう側、罪に打ち勝った世界に私たちを連れて行ってくれる**のです。何故なら、主イエス・キリストが私たちの醜さや罪を全部ご自分の身に引き受けて下さったことを私たちは知っているからです。そして、そのイエス様は私たちに期待していると思います。「わたしはあなたを愛している。わたしに従ってきなさい」と。あのルワンダの出来事も、

人間の**変えられた心**から始まっているのです。神様が私たちの心に勇気も与えてくれる筈です。神様の愛は、私たちの心から恐れを取り除いてくれるからです。

私たちも、また私たちの川越教会も今後どのような歩みをするかを神様は期待しているでしょうか。そのことをご一緒に本当に考えて、クリスマスを主を待ち望み、お迎えしたいと思います。

お祈り致します。